

資料書き換え

敦賀原発審査再び中断

規制委、体制改善確認まで

日本原子力発電が敦賀原発2号機(敦賀市)の審査資料を不適切に書き換えた問題を巡り、原子力規制委員会が十八日の定例会合で、再稼働の前提となる審査を中断することを決めた。原電の体制改善が確認できるまで再開しない方針で、時期は見通せない。

審査では原子炉建屋直下

の断層が活断層かどうかが焦点。活断層と認められると廃炉を迫られるため、原電が審査で否定しようとしていた。

会合後の記者会見で、更田豊志委員長は「長期間にわたって(審査を)放り出したいわけではない。(活断層か否か)科学的に決着をつけたい」と述べ、原電

が信頼性のある審査資料を提出できるようになったと確認できれば再開する考えを示した。審査再開の要件として原電の体制の確認を進める一方、書き換えの経緯や原因についても別途、検査を続ける。

問題は規制委が二〇二〇年二月、敷地の掘削調査試験を分析した「ボーリング

柱状図」の記述が無断で書き換えられていることを指摘して発覚。柱状図の書き換えは計二十五カ所に上った。うち十八カ所は、原子炉建屋直下の断層の活動性を判断する上で重要な地点で掘削した試料に関するものが大半で、地層の状態を「未固結」から「固結」と書き換えるなどしていた。

原電は「記載を充実させるため、肉眼による地層の観察結果に基づき記載を顕微鏡によるものに変更した」と、意図的な改ざんなどではないとしているが、規制委側は「生データの扱

いとしてあまりに非常識」(更田氏)などと批判。専門家から「固結度は(断層の)活動性を判断する重要な状況証拠だ」との指摘も出ている。

規制委は問題発覚後にも審査を中断したが、原電が地質調査会社の生データを

示したことなどから二〇年十月に再開を決めた。今年七月の定例会合で、書き換えの経緯などを調べている規制委事務局から、原電の業務管理に問題があったとの中間報告を受け、改めて中断を検討することにした。